



湯浅泰雄の原像

丸 山 敏 秋

(一般社団法人倫理研究所理事長)

湯浅泰雄はどのような青少年期を過ごしたのであろうか。——それは辛苦に満ちたものであったと推察できる。戦前の昭和史でも奇異奇怪な事件とされる「ひとのみち教団弾圧」が起こり、路頭に迷う関係者の中に、幼少の湯浅泰雄も含まれていたからだ。

◆大正 10 (1921) 年以降、新興宗教の取り締まりが強化され、社会を揺るがせる弾圧事件が起きていく。なかでも巨大化していく「大本」と「ひとのみち」への弾圧は徹底的であった。「ひとのみち」は金田徳光 (1863～1919) が興した神道徳光教会 (徳光教) に由来する。金田の死後に幹部の一人だった御木徳一 (1871～1938) が、教義や苦難救済の技法を受け継いで設立した。そこでは天照大神を太陽神として信仰し、教育勅語を教典とし、もっぱら実利的な処世訓が説かれた。のちにこの教団の最高幹部 (准沮) の一人となったのが湯浅真生 (1895～1955) である。奇しくも筆者の祖父である丸山敏雄 (1892～1951) も、4 年遅れて准沮となった。昭和 12 年 4 月に起きた弾圧事件に連座して共に投獄され、出獄後は 7 年に及ぶ長い裁判を闘い抜く同志であった。

◆湯浅真生は福岡県筑紫郡の士族の家に生まれた。若い頃から外国文学に耽溺し、早稲田大学を卒業すると、大阪朝日新聞社に 3 年ほど籍を置くが、マルキシズムのプロレタリア文芸へと急激に左傾化し、農民文芸運動にのめりこんでいく。しかし思想と現実の乖離に精神を病むほど懊悩し、虚無主義に陥っていたときに、母親から「ひとのみち」を知る。当初は疑念と軽蔑しか抱かなかったが、次第に教えの背後に潜む「大きなもの」に惹かれていき、ついには教団に身を投じて信仰の獲得に努め、幹部として活躍するようになる。

同教団の指導者 (教師) になるには、あらゆる俗縁を捨て、持てる財産の一切を教団に提供しなければならない。幼い子女も親元から離され、教団が経営する新設の小学校などで寄宿舎生活を送った。小学校低学年の湯浅泰雄もその一人で、4 歳年長の丸山敏雄の長男 (竹秋、筆者の父親) もそこにはいた (別添拙稿を参照)。深い悲しみの始まりである。

父親が出獄すると、一家は極貧に耐えつつ、長く辛い裁判に臨む。当時の不敬罪は重罪

丸 山 敏 秋 (まるやま・としあき)

〔専門分野〕倫理学、東洋思想史

〔略歴〕1953 年東京都生まれ。東京教育大学卒。筑波大学大学院哲学思想研究科修了 (文学博士)。東京高等針灸柔整専門学校本科卒業。日本学術振興会奨励研究員、筑波大学等の非常勤講師を歴任。1987 年、一般社団法人倫理研究所入所。96 年より同研究所理事長に就任。人体科学会副会長、日本家庭教育学会副会長。著書に『氣』(東京美術)、『黄帝内経と中国古代医学』(東京美術)、『針灸古典入門』(思文閣)、『道徳力』(風雲舎)、『最高の自分を生きる』(致知出版社)『母性とたましい』(倫理研究所) など多数。

である。湯浅真生たち元准祖への判決は、第一審第二審ともに、よもやの有罪（執行猶予付き）であった。その間に、思春期から青年期を送った湯浅泰雄が「国賊の子」としてどれほどの苦悩を味わったか……。記録は何もないが、筆者は類似の経験をした祖父の記録や父親からの話で容易に推察できる。しかし湯浅泰雄の場合、父親に反発したり離反することなく、むしろ父親の真情を汲み取り、理解しようと努めた。なぜそう言えるのか。

◆湯浅真生の著書に『人間の発見』がある。昭和 22 年に清流社より上下巻が発刊され、修正を加えて一冊に再編したものが 1958 年に自然社より出版された。その再編に 33 歳の湯浅泰雄が携わっている（もう一人は佐伯克——不明）。自然社とは、元准祖の筆頭格だった橋本郷見が 1946 年に「神道徳光教会本部」を設立し、3 年後に改称した神道系の教団で、湯浅真生も身を寄せていた。本書は「ひとのみち」で体得した真理に基づいて人生を論じたもので、「本書は著者の人間実験の記録である」と序文にある。再編にあたり編者は「現著者の思想上の先輩である金田徳光、御木徳一両先生の精神を正しく伝えることを念願とし、（中略）修正のために何度かこの書を読み返すにつれて、これらの諸先輩に対する尊敬の念を新にせざるを得なかった」と「あとがき」に書いている。

昭和 39（1964）年、湯浅泰雄の最初の単著『宗教と人間性』（現代倫理学叢書、理想社）が出版された。本書の冒頭には「亡き父にささぐ」と献辞があり、「あとがき」には「私事にわたるが、私が宗教に関心をもつようになったのは、少年のころから信仰の世界に目をひらかせてくれた亡父のみちびきよることが多い」と書かれている。そして亡くなる前年（2004）に出版された最後の大著『哲学の誕生』（人文書院）の「あとがき」に「私は両親の影響で子供のころから信仰に関心をもっていたが」とある。——父親である湯浅真生が決定的な影響力を持っていたのは間違いない。それは何よりも宗教や信仰に対する興味と関心と呼び起こした点において、そして「この人生をいかに生きるべきか」を真摯に探究せしめた点においてである。

◆湯浅の諸研究の出発点になった若き日の宗教・信仰への関心は、大学・大学院での倫理学・経済学の研究生活においても薄らぐことはなかった。先の『哲学の誕生』の「あとがき」の一文にはつづいてこうある。——「五十年余り前、学者の卵として倫理学と日本思想史を学び始めたころ、本山博師について瞑想と修行を始めた。それから信仰の心理や修行の体験について研究したいと思って、心理学や精神医学の勉強を始めたその中で最も関心を覚えたのがユング心理学である」。本書は古代ギリシアにおいて哲学が誕生した状況を独自の視点から詳細に研究した成果であるが、そこに至っても哲学の「誕生」の背景にある民間宗教を含む宗教・信仰の存在がきわめて重視されている。

◆湯浅泰雄の学問は、広く、深く、そして切実である。その内奥には「原像としての父親」が存在していた。湯浅はその原像に導かれるように、つねに人間存在の本質をなす宗教に眼差しを向けつつ、「生きる」という切実な課題である倫理を探究し、それをつなぐ心理（超心理を含む）に着目して、実践経験も含む研究を深めた。それら宗教・倫理・心理が三位一体となって骨格をなし、そこから多方面へ触手を伸ばして形成されたのが湯浅泰雄の学問、湯浅学であるといえよう。

ある日の湯浅の言葉が思い出される。倫理には救済力があるのかどうかと筆者が問うと、〈難しいだろうね。倫理・道徳の根底に信仰というものがなければ救済は……〉。「含羞の人」である恩師の、いつもの訥々としたその一言が、わが脳裏に焼き付いている。